

# 天王寺動物園アフリカサバンナ 肉食動物ゾーンとアニマル・エコアート

若生 謙二

## 1. はじめに

2006年9月9日に天王寺動物園アフリカサバンナ肉食動物ゾーンがオープンした。天王寺動物園が動物を生息地に近い環境で展示する生態的展示の考え方で再生を進めていることや、その考え方にもとづいてアフリカサバンナの草食動物ゾーン、アジアの熱帯林ゾーンを開設し、筆者がその計画にとりくんできた経緯については、すでに紀要18<sup>1)</sup>、24<sup>2)</sup>、27<sup>3)</sup>号で紹介した通りである。草食動物ゾーンが開設されてから、8年の歳月が流れたが、この間に動物園展示の世界には大きな変化がみられた。旭山動物園での行動展示の登場と、その効果による飛躍的な入園者数の増加である。旭山動物園のとりくみは、旭山現象ともよぶべきもので、多くのメディアが動物園をとりあげ、日本に動物園ブームをおこすひきがねとなった。

旭山動物園が主に動物の行動をひきだして展示しようとするのに対して、天王寺動物園のとりくみは、動物の生息環境の再現を図り、観客と一体感のある環境でその生態を展示しようとするもので、生態的展示の高度な手法として、生息環境一体型展示あるいは生息環境展とよばれている。

サバンナ肉食動物ゾーンは、サバンナ草食動物ゾーンに隣接して双方を一体化するものとして計画された。このゾーンの完成で、草食動物のキリンやシマウマと捕食者であるライオンやハイエナを一望のもとに眺めることができるようになり、2006年の入園者数はその前年と比べ約40万人の増加をみている。

本稿では、このエリアの計画のプロセスと評価をふくめたその後の経緯について述べる。このエリアの工事に際しては、工区を囲む銅板塀に大阪芸術大学環境デザイン学科の学生らが、完成後のサバンナの絵を描いた。このとりくみは、長期にわたる工事の際の無味乾燥な塀に完成後の動物のくらす風景を描いて、エコロジーを訴えるアニマル・エコアートともよぶべきものであり、天王寺動物園では環境デザイン学科の学生たちが数年前からいくつかの作品にとりくんできた。本稿では天王寺動物園で進められてきた学生たちによるこうしたアニマル・エコアートのとりくみの経緯と今後の方向性について述べる。

## 2. サバンナ肉食動物ゾーンのとりくみ

### 動物の行動を間近にみせる生態的展示

生態的展示における生態とは動物の生活のことを意味する。従って、動物の生息環境や生活様式を展示することが課題になる。天王寺動物園のサバンナゾーンでは、動物の生息地に近い環境の再現を図り、観客がそこに入り込んだような感覚をうみだす、生態的展示の高度な手法である生息環境展示を行っている。生息環境展示にはいくつかの空間構成の原則があり、わが国でこの展示手法が行われているのは、天王寺動物園のアジアの熱帯林ゾーンとこのサバンナゾーンである。

サバンナゾーンは草食動物ゾーンと肉食動物ゾーンに分けて計画されたが、これは計画の手順を二つの

ゾーンにわけて行ったためであり、最終的にはこれらは融合されてサバンナの生態系のランドスケープを構成するように計画されている。計画にあたっては、生息地の環境を調査するために、アフリカのケニアとタンザニアの国立公園や保護区の現地調査を行った。現地調査の様子は紀要24号に報告している。現地調査にもとづき、サバンナ草食動物ゾーンでは、草原、疎林、岩山、河畔林などのそれぞれの環境に適応してくらす動物の生活を展示することとした。肉食動物ゾーンでは、このうち表出した火崗岩で構成されるコピエとよばれる岩山のゾーンを中心に景観を構成している。

草食動物ゾーンが完成してしばらくした頃、生息地に近い環境が造りあげられたことはいいが、動物が遠くで見にくい、という評が新聞に書かれた。これには設計時には予測しえないいくつかの理由があった

が、そのようなことは対外的には言い訳にしかならない。やはり、動物園では動物は近くで眺められなくては観客の評価はさがる。私たちは、肉食動物ゾーンの設計にあたっては、生息地の環境づくりとともに、動物の行動を可能な限り間近に見せる工夫に力をつくした(図1)。

この頃、旭山動物園の行動展示が脚光をあびはじめた。旭山動物園は、入園者数が低迷し閉園の危機に瀕していたが、小菅園長らの努力により、行動展示と称した、動物の特徴的な能力や行動を展示することで、入園者数を急増させた。そこでは、鉄塔の空中回廊を用いてオランウータンの樹上性の行動を展示するなど、人工的構築物を積極的に用いて、動物の行動をひきだしているのが特徴である。

生態的展示と行動展示の関係は、どのように整理さ



図1 天王寺動物園アフリカサバンナゾーンの平面図

れるべきなのであろうか。

生態的展示における生態とは、野生動物の生活のことである。動物は文字通り動く生き物であり、その生活は住居としての生息地とそこでの行動からなる。すなわち、生態的展示とは、可能な範囲で再現した生息環境の下で、野生下での生態としての行動を發揮させることである。生態的展示が環境の再現に力を入れるのは、遊泳、採食など本来の行動をひきだすためである。生態とは行動を含む生活なのであるから、行動展示は生態的展示のうち、行動に特化したものと位置づけることができる。違いは人工的構築物の扱いである。旭山動物園の行動展示は、行動を發揮させるために、人工的構築物を積極的にとりいれている。旭山動物園の行動展示は、行動をひきだすために他の環境の単純化を図った機能主義的なデザインである。それに対して、天王寺動物園で行っている生態的展示の高度な手法である生息環境展示では、植物などの自然素材や微地形の変化などで生態的な環境の再現を図り、野生下での行動を發揮させようとするもので、自然主義的なデザインといえることができる。

このような中で、私たちは天王寺動物園、サバンナ肉食動物ゾーンの設計にとりくむことになった。この設計に関わったのは次の人々である。この事業は大阪市が発注するものであり、天王寺動物園の中川哲男園長、宮下実保健主幹を中心とするチームが構成されている。動物園からは長瀬飼育課長代理、榊原獣医らが飼育担当職員の意見をいれて設計に意見を述べた。設計を行う受託事業者は㈱空間創研である。同社はすでにサバンナ草食動物ゾーンやアジアの熱帯林ゾーンで生息環境展示の実績をあげている。実施設計と施工監理を担当したのは奥川良介君である。彼は大阪芸術大学環境計画学科の卒業生で、私が大学に赴任した際の最初の教え子である。この他、佐々木宏二、名取重広の両氏が参画した。私は基本構想の立案から基本計画、基本設計、実施設計にいたる一連の事業に参画した。

## サバンナ肉食動物ゾーンの展示

サバンナゾーンは草食動物ゾーンを計画する際に、アフリカのケニア、タンザニアの両国の実際のサバンナの生息地を調査した上で、設計の基本的な考え方を提示している。現地調査をもとにサバンナの環境を再現し、草食動物とその捕食動物である肉食動物が同じ空間にくらすように配することにつとめた。

サバンナの草原動物ゾーンのビューポイントは、モート（堀）で動物と観客を仕切り、動物を見せていた。モートは視覚的な障害がなく見やすいのであるが、どうしても、動物との間に距離がでてしまう。草食動物ゾーンでは、肉食動物ゾーンを造るまでの仮設の園路として粗いフェンスで園路と動物を隔てていた。ここではモートがないので、その分だけ距離が近づけられ、2m近くの距離で動物に接することができた。キリンやシマウマを至近距離で眺めることができるため、この園路は観客に人気であった。大型草食動物では粗いフェンスでもさしたる支障なく動物を眺めることができる。

冒頭に述べたように、この計画では動物を間近に見せることが課題であったため、新たなゾーンの最初のビューポイントでは、この手法を用いて間近に草食動物を見せることにした。モート越しに全体景の中で草食動物を眺めたあと、小さな岩場と灌木林を通り抜けて進むと、樹林を背景に草原を歩むキリンやシマウマの姿があらわれる。間をへだてるのは横張りのワイヤーロープを30cm間隔で張ったフェンスである。観客は2m近くまで動物に近よることができ、動物の側は観客のエリアよりも高く設定されている。そのため、動物の姿は間近にそして、見あげて眺めることができる。野生での草食動物の食餌行動には、草本を食べるグレーズング (grazing) と樹木の葉を食べるブラウズング (browsing) という行動がみられる。この展示では、シマウマが草本を食べ、キリンが樹木の葉を食べるという、野生でみられる行動を、間近に眺めることができる。それは野生下でみられ





写真2 間近に見上げて眺めるキリン



写真3 セレンゲッティ国立公園のコピエ

る生態としての行動である。(写真2)。

草原の動物を眺めた後、曲がった園路を進むと大きな岩場が広がる。大地に埋もれた火崗岩が侵食して表出したものでアフリカではコピエ (kopje) とよばれている。広大な大草原に突出するコピエは、大海原に点在する島のような景観であり、ドイツ語では海原の島を意味するインゼルベルグ (Inselberg) ともよばれている (写真3)。岩は間隙に樹木が成長することも多く、岩場だけのものから、樹林に覆われたものまでさまざまな景観を呈している。コピエの内部では、岩の空隙が多く動物のすみかとなり、ライオンがすみつくこともある。肉食動物ゾーンはこのコピエをテーマとしている。

灌木で覆われた大きな岩場にそって歩を進めると、小さな小屋がみられる。国立公園のビジターセンターをモチーフにしたビューシェルターである。小屋に足をふみいれると、ガラス越しにブチハイエナが姿をあらわす。その奥ではモート越しにキリンやシマウマの姿をみることができる (写真4)。ハイエナが水を飲み、キリンが樹木の葉を食べるといった生態を同時に観察することができる試みは世界で初めてである。

さらに岩場をすすむと、コピエの中に入る。岩場に屋根をかけた国立公園のビューシェルターという設定であり、ここからは岩場の上から今しがた眺めてきたサバンナの草原を一望することができる。サバンナゾーンでは動物に遭遇する際には、見上げで観察する



写真4 ハイエナとキリンの通景



写真5 草食動物の採食行動を眺める



写真6 キリンの採食行動を眺める

ことを基本にしているが、ここではコピエの上からサバンナをゆるやかに俯瞰する（写真5）。草原の草を食むエランドやシマウマ、トムソンガゼル、樹木の葉を食するキリンなどの採食行動（写真6）、あるいは彼ら相互の種間関係など、草食動物の生態としての行動をつぶさに観察することができる。キリンのブラウジングとよばれる採食行動を至近距離で見せるために、このシェルターには、観客側の岩に葉のついた枝を据えつける装置を配した。こうすることで、キリンは葉を食べるために、観客側に近づき、観客は至近距離でキリンの採食行動を観察することができる（写真7）。草食動物の採食行動を促す装置はエンリッチメント（註1）であり、同時に生態的展示としての効果を高めている。



写真8 キリンとその捕食者であるライオンの通景



写真7 葉つき枝を配してキリンの採食行動を間近に観察する

また、岩場のシェルターでは、岩場にくらす小動物であるハイラックスをガラス越しに観察する。

岩場をさらにすすむと、岩を切り開いて設けられた階段があらわれ、手すりをもって降りる（註：身障者用にはスロープの園路が設けられている）。せりだした岩場を抜けると、二つの切り立った巨大な岩の間に草原と樹林が広がる。随所に岩がせりだす草原にはライオンが姿をあらわし、モート越しの奥の疎林では、キリンがナンキンハゼやニセアカシアの葉を食する（写真8）。サバンナにくらすキリンなどの草食動物と捕食関係にある肉食動物のライオンを同一の視界に展示することで、その生態的關係についての理解を図る景観を造成したもので、通景とよぶ景観構成である。



写真9 間近で眺めるライオン

捕食関係にある動物をモートを用いて一望のもとに展示することは、生態的展示の手法として、これまでもすでに1960年代にミルウォーキー動物公園などで抽象化した造形として行われているが、生態的関係とその生息環境を自然主義的に表現し、その生態としての行動を發揮させた作品は世界的にも稀有である（註2）。ライオンのいるエリアには高さ十数mにもおよぶ大きなニセアカシアがそびえる。これは造成前からみられた既存樹であり、計画にあたっては、ライオンが登って外にでることがないように、いくつかの大きな枝を切除して樹木を保存した。観客近くの巨樹は、奥の樹林との関係で、遠近感を構成するものとして、またライオンの木陰や爪とぎ用として、重要な役割を演じている。

冬になると、中央の岩場にライオンが身体を横たえることが多い。奥の草食動物との関係からみると、この場にライオンがいることがもっともよいシャッターチャンスとなるが、これには仕掛けがある。擬岩の岩場にはライオンがこの場を好むように、ヒーターが埋設されている。ビューポイントから向かって左側の巨大な岩に近づくと、岩場のライオンはガラス越しに至近距離でみることができる（写真9）。ライオンを至近距離で眺めることができる、このビューにはいつも人だかりができています。

ライオンを間近に見て、巨大なコピエをあとにすると、パピルスの茂る小川の橋をわたり、再び草食動物のいる草原を反対側から眺める丸太づくりのビューポイントにいたり、見上げの景で草食動物を眺める。4月になると大きな緑陰をかもしだすニセアカシアの樹林を通り抜け、大池の前のウッドデッキで池越しにサバンナを眺望して旅をおえる。

### サバンナゾーンの評価

サバンナ肉食動物ゾーンは2006年9月9日にオープンした。それに先立ち、9月7日には新聞等のメディア

に公開された。その際にライオンとキリンの通景を構成する写真が配信され、記事となった。この写真は評判をよび、数日後、いくつかのブログで紹介された。あの写真は本当だ、本当にあのような写真をとることができる、といった内容であった。この写真が影響したのか、あるいはブログが力をそえたのか、動物園の入園者数は急増し、（2005年 1,412,025人、2006年 1,839,969人、2007年 1,916,275人）休日の入園者数が1万人をこえることが常態化した。入園者数が増加したことには、他のとりくみも大きな力を發揮している。この前年から、動物園では、飼育担当者が観客の前で、動物の解説を行うようになり、おかげで動物園では、随所に人だかりがみられるようになった。

オープン以降の急速な入園者数の増加を考えると、写真とそしてそれを掲載するメディアというものの威力をみせつけられた思いがする。報道写真の中には世論を左右する力をもつものもある。もとより実体があれば話にならないが、今回の経緯をみると、9月7日の写真はそれに近い力を發揮したような気がする。

生態的展示は動物が遠くて見にくいという評が語られたことがあった。たしかにそのように造ればそうなるであろう。しかし、サバンナゾーンで実現したように、ブラウジングのための葉付き枝を観客の近くに設置するなど、動物を近くによせるための工夫をすれば、さしたる経費をかけることもなく動物を間近に見ることは可能になる。サバンナゾーンでは、観客の近くに緑陰などの日陰や、ヒーターや水浴び場、スポットクーラーなどを設けたが、それは動物が好んで近づきたくなる行為を誘発するためのものであり、動物の福祉に配慮したエンリッチメントの一種である。

### 天王寺詣で

サバンナゾーンが完成した頃から、動物園の新設や再生を考える自治体から天王寺動物園の生態的展示を見学しようとする動きが相次ぐようになった。旭山動



動物園がひきがねとなった動物園ブームで動物園を再生しようとする自治体がふえたものとみられる。話を聞いてみると共通する悩みをもっていることがわかった。旧来の展示を刷新したいが、旭山動物園のような行動展示を行うべきか、天王寺動物園で行っているような生態的展示の方向をめざすべきか、というものである。あるいはどうすればそれが可能になるのかということであった。

私は本稿で述べたように、行動展示と生態的展示は異なる概念ではなく、生態を発揮させ表現するのに、機能主義と自然主義のどちらの方向をめざすべきかの違いであることを述べた上で、天王寺動物園のアジアの熱帯林やサバンナの展示の造り方について、現場を見ながら説明を行っている。すでに紀要27号のアジアの熱帯林の論考で述べたので、本稿では述べなかったが、生息環境展示では、周囲の環境を隠したり、取り込んだりする多くの技法が用いられている。これらの技法は現場を見ながら説明すると理解がきわめて早い。天王寺動物園のサバンナゾーンはこれらの動物園にとってのモデルケースとなっている。これらについての解説を行った名古屋市東山動物園、横浜市よこはま動物園、長野市茶臼山動物園等では、生息環境展示についての理解が深まり、現在、私はそれらの園の計画や設計に参画している。

もう一つ、天王寺動物園の生態的展示の見学についての案内を求められるケースがある。学会のエクスカージョン、造園系の大学や高校の見学会である。それはこうした空間をいかに造り出すのかという設計者、あるいはそれを学ぶ者の側からの求めである。これらのケースでは、動物園の展示事例であるということよりもむしろ、都市環境にこのような空間を創造した空間構成の手法を紹介している。本稿では詳細を割愛したが、こうした空間の造成には、2m程度の高低差を微細に活用し、そこに植栽を施すことで、効果的な空間構成が生みだされる。サバンナゾーンをはじめとした

天王寺動物園の生態的展示は、環境デザインの教材となっているのである。

天王寺動物園の生態的展示のとりくみはすでに、Zoo21計画で日本造園学会賞、アジアの熱帯林でエンリッチメント大賞を受賞するなど、いくつかの受賞を得ている。2008年2月、天王寺動物園サバンナ肉食動物ゾーンは、(社)日本公園緑地協会による都市公園コンクールで国土交通大臣賞を受賞した。

### 3. 環境デザイン学科学生による

#### アニマル・エコアート

サバンナ肉食動物ゾーンの工事に際しては、工区を囲む鋼板塀に大阪芸術大学環境デザイン学科の学生たちがサバンナの絵を描いた。アニマル・エコアートとよぶべきこの描画については、すでにアジアの熱帯林を造成する時から行われているので、その経緯と今後の展望を含めたこのとりくみの意義について述べることにしたい。

天王寺動物園に本学環境デザイン学科の学生が絵を描くとりくみをはじめたのは、2004年の「アジアの森」の工事からである。宮下飼育課長(現園長)と「アジアの森」の工事の進め方について検討していた際に、せっかく、天王寺にゾウの森をつくるという夢のある事業を行うのに、工事の間、塀で覆われるのもったいない、何とかならないかという話がでた。そこで、芸術大学の学生にアジアの森やそこに住む動物の絵を描いてもらってはどうかという話になった。翌日、授業の最後にこの話を学生にしたところ、きわめて積極的な反応が返ってきた。工区と壁画の大きさや時期などを述べておいたところ、一週間後に3年生の橋爪千恵君が下絵を描いてきた。絵は造られる展示にふさわしいものであった。さっそく、橋爪君をリーダーとするチームを構成し、作画にむけてとりくむこ

とになった(註3)。しかし、資金は何もない。宮下課長が日本ペイント(株)に依頼し、画材の水性絵具を調達していただくことになった。学生はすべてボランティアである。学生チームは下絵を完成させ、実際の銅板扉に描くことになった。工期の関係で、描画は6月の梅雨の時期になった。折からの梅雨とたたかいながら、

飼育係や応援する観客との交流で学生は多くのことを学んだ。そして、見事に高さ3m、長さ30mにおよぶゾウの森の壁画を完成した(写真10)。その様子は7月のNHKテレビの午後6時のニュースで放映され、新聞でも報じられた。

動物園ではこのとりくみの評価が高かったことから、



写真10 アジアの森の建設時に描かれた壁画作品



写真12 サバンナ肉食動物ゾーンの建設時に描かれた作品「サバンナの喜怒哀楽」



写真13 アーツアンドエイブス展で理事長賞を受賞した「Human-side」



写真15 サバンナゾーンの出口に設けられた防音壁に描かれた4作目の作品「サバンナ」



翌年に次の企画として、園の北西端に配されている動物園の資源ゴミ保管場を囲む塀にエコロジーの絵を描いて欲しいという依頼があった。橋爪君は、1年生を集めてチームを組織した（註4）。橋爪君たちと議論をし、エコロジーから動物や環境を描くものとして、次のような構想をたてた。熱帯雨林の生態系の頂点に位

置づくトラとその生息環境としての森林、この巨大な生態系のはじまりである生命の芽生えとしての葉を描こうというものである。描画は2005年7月に行われ、同月末に完成した（写真11）。

2005年の秋、サバンナ肉食動物ゾーンの実施設計が大詰めをむかえていたとき、宮下園長（宮下氏は同





写真11 資源ゴミ保管場の塀に描かれたアニマルエコアート

年、園長に就任した)から翌06年夏にサバンナ肉食動物ゾーンの工事がはじまるので、その鋼板塀にサバンナの絵を描いてほしいとの依頼があった。橋爪君はすでに4年生になっていたが、二つの壁画プロジェクトへの参加を通じて後輩を育てていた。今回の壁画はこれまでで最長の40mである。40mの絵巻物を描くのであるから、そこには大きなストーリーが必要とされる。チームは半年間をかけて、「サバンナの喜怒哀楽」と題する雨季、乾季にわたる一年間のサバンナの物語とその下絵をしあげた。

2006年6月にサバンナ肉食動物ゾーンの工事がはじまり、鋼板塀が設置された。すでに、橋爪君は卒業しており、3年生となった浅野万稀君と根岸磨与君がリーダーとなって新たなチームが編成された(註5)。描画は大学が夏休みの7月末から8月末までの一ヶ月あまりをかけて行われた。今回の描画は前回と比べていくつかの違いがあった。動物園が参加学生の交通費と昼食を負担してくれることになった。また、鋼板塀に隣接する工事事務所には、この設計を担当し、施工監理を行うことになった、彼らの先輩である奥川良介君が詰めていた。奥川君をはじめ、工事事務所の人々は、あたたかく彼らの作業を援助した。

また、この話を当時の映像学科長で映画監督の中島

貞夫先生に話したところ、彼らのとりくみを映像にして記録に残そうとっていただいた。大学院映画・映像研究室の院生である向陽君が撮影と編集を担当することになった。

このような中で2006年、学生たちのひと夏の青春をかけて40mの壁画は描かれた(写真12)。話しを聞いて美術学科の先輩である高見保徳君がかけつけてくれた。高見君はスプレーガンの使い方などを教えて、絵に深みをもたせてくれた。9月3日、壁画は完成した。その日、私と宮下園長は、天王寺動物園90周年記念イベントとして行った、国立民族学博物館名誉館長の梅棹忠夫先生との鼎談をおえて、動物園に帰ったところであった。夕日を背に通天閣の下に描かれた40mのサバンナには学生たちの想いがこめられ、動物は今にも動きだしそうであった。

この作品は、いくつかの波及効果をうみだすことになった。

2006年11月、大型類人猿の保護を訴えるシンポジウムであるSAGA国際シンポジウムが大阪芸術大学で開催されることになった。大阪芸術大学での開催にあたって、私たちはアーツアンドエイプスという類人猿保護のための作品展を開催することにした(註6)。芸術からエコロジーを考えるために5月に芸術研究所によって開催されたアーツアンドエコロジー展の第二弾である。作品展には全学科から多くの作品がよせられた。その中にサバンナの壁画に手を加えた7.5mの作品があった。「Human-side」と題するこの作品は、サバンナの壁画とそれを描く学生たちの写真にさらにゴリラやチンパンジー、ボノボ、オランウータン等の大型類人猿が描画に参加しているという作品である(写真13)。類人猿たちは描かれるサバンナの動物の側ではなく、絵を描く学生たちの側にたっている。アーツアンドエイプス展では大型類人猿がヒト科であり、絵を描く能力があることを紹介するために、京都大学霊長類研究所のチンパンジー「アイ」や多摩動物公園の



オランウータン「モリー」をはじめ、アメリカのチンパンジー「ワショー」等、世界の大型類人猿の描いた絵画作品を展示した。「Human-side」は、これらを見ずえ、サバンナの描画を通じて、大型類人猿はヒトの側であるということを強調した作品であった。提出された学生・院生の作品は学院理事、学科長、SAGA シンポジウム開催者らの審査を経て、優秀作品が選定された。「Human-side」は最優秀賞である理事長賞を受賞した。2006年11月5日、芸術劇場で行われた授賞式で、塚本邦彦理事長から、根岸磨与、浅野万稀、田端祐香、悦見麻里、内藤裕平、角戸由希らの諸君に対して賞状と京都大学霊長類研究所のチンパンジー「アイ」の描いた絵が手渡された。

向陽君の映像作品は完成し、「天王寺動物園にサバンナを描く—環境デザイン学科の夏」と題する作品となり、SAGA 国際シンポジウムの、ジェーン・グドール博士も参加した懇親会の席で放映された。

サバンナの工事現場に描かれた本体の壁画には次の役割が待っていた。鋼板塀は工事のために設置されるのであるから、工事が終了すれば撤去され、リース業者に返還される。アジアの森の際に描かれた鋼板塀の絵も、絵の具は洗い落とされて鋼板は返却された。しかし、今回は違った展開となった。天王寺公園の東側に谷町筋に面した堀越公園という街区公園があり、この公園の谷町筋に面したエリアに現在、白地の塀が設けられているという。せっかく、学生諸君がとりくんだ労作をそのまま洗い流すのではなく、堀越公園の白地の塀ととりかえて、恒久的に保存し、谷町筋を通る人々に見てもらおうというのである。園長から施工監理をしていた奥川君に命令が下り、彼は後輩の描いた絵の一部を谷町筋沿いに設置できるように配置をし、2006年10月、サバンナの壁画は設置され公開された(写真14 a.b)。サバンナの絵は永住の地をえて、公開されることとなったのである。

園長は当初、落書きをされるのではないかと随分心



写真14 a(上).b(下)  
谷町筋沿いに設置された「サバンナの喜怒哀楽」

配された。しかし、公開されて2年になるが、これまで一箇所もきずつけられたことはない。学生諸君がエコロジーの想いをこめて描いた作品には、そのようなことを拒む力が宿っているのであろう。

### 更なる展開へ

動物園での描画のプロジェクトはさらに新たな展開をとげつつある。壁画の成功をみて、宮下園長は次のような提案をされた。1997年に造成されたサバンナのエリアにサイの展示がある。サバンナ草食動物ゾーンを歩くと、灌木林の中を散策しながら進むことになるが、このビューポイントからは、サイの展示の奥に通天閣と高速道路が丸見えである(註7)。このエリアで丸見えとなる高速道路を隠すために、道路の遮音壁に



サバンナの空の絵を描こうというのである。

この構想に応じて、環境デザイン学科の清水一陽君がサバンナの空に舞うフラミンゴやハゲワシ、キリマンジャロの山並みなどの下絵を描いてくれた。しかし、高速道路の高さは桁下が10mあり、遮音壁の壁面は高さが3.2m、幅が75mもあるために、この事業は鋼板塀のように簡単には進まない。直接壁面に描くには、足場を組まなければならない、その費用を捻出した上で、下絵の作成にかからなければならない。園長がこの話を新聞社にしたところ、毎日新聞が2008年5月8日付で、大阪日日新聞が同年5月18日付でこのための資金を募集する記事を掲載した。資金の目途がついて、描画の方法が決まり次第、高速道路の遮音壁にサバンナの空を描くというプロジェクトは始動する予定である。

これとは別にもう一つの鋼板塀にアニマル・エコアートを描こうという企画が持ち上がった。ライオンがサバンナゾーンに移動した後の旧ライオン舎の敷地に、大阪市建設局が下水道を敷設するための立坑掘削の工事を行うことになった。宮下園長から、工事に際しては動物への防音壁として高さ10mにおよぶ巨大な鋼板壁が設置されるので、そこに動物の絵を描いてほしいという依頼をいただいたのである。

塀はアフリカサバンナゾーンを通り抜けた位置に面している。サバンナの余韻を感じながら、エコアートに向きあう作品がふさわしいであろう。3年生の奥明洋君と齋藤陵悟君がリーダーとなって、原友里恵君が下絵を描き、総勢27名でサバンナとそこに暮らす動物を描いた、高さ3m、幅25mの作品にとりくむことになった(註8)。作品は2008年8月から9月初旬にかけて描かれ、9月13日に、4作目のアニマル・エコアートは完成した(写真15)。

## おわりに

サバンナゾーンは動物を自然な環境のもとで近くに見たいという、動物園の展示が追い求めてきた課題の一つの成果を示した。動物を間近に見せるには、採食行動のための装置や陽光を遮るような場を観客の近くに配することが必要である。これらは人工的な装置によっても可能になるが、自然主義として生息環境に近い環境をつくりだすことを考えるならば、ブラウジングのための葉付き枝や緑陰としての落葉樹など、多くの場合は植物を配することでこれらの環境は可能になる。

北九州市の到津動物園のチンパンジーの展示で興味深いシーンを観察した。チンパンジーが自発的に餌を採取することができるように、設計から考慮しモルタル擬岩の人工アリ塚に枝などの道具を用いて、アリなどの餌を採取することができる装置が配されていた。しかし、チンパンジーはこれには見向きすることなく、隣に置かれた倒木の小さな洞に枝をさしこんでは、アリの食べていたのである。やはりモルタルより自然の倒木に親和性を感じていたのであろうか。

植物を配することは多くの困難を伴うが、樹木や草本とともに自然物としての倒木、枯損木、さらに必要な場合には擬木を併用することなどで、相乗的に効果を発揮させることが必要であろう。

自然主義的に動物を展示することは、動物を囲い込んだ敷地の中だけではなく、その周囲の環境をとりこむ技法が重要になる。動物の本来の行動を発揮させるための環境だけではなく、動物の精神的安寧をうみだす観点からの環境づくりも必要である。そのためにも、自然物を用いた環境づくりの手法をつくりだすことが必要であろう。

## 文献及び註

- 1) 若生謙二 (1998) : 生態的展示と天王寺動物園爬虫類生態館、大阪芸術大学紀要藝術18
- 2) 若生謙二 (2001) : 天王寺動物園サバンナゾーンとランドスケープ・イメージ、大阪芸術大学紀要藝術24
- 3) 若生謙二 (2004) : 天王寺アジアの森—環境デザインとしての動物園づくり—、大阪芸術大学紀要藝術27

註1) エンリッチメント: 動物は自然界では食物の採取をはじめ生活するために多くのことをなさなければならないのに対して、飼育下では環境が単純化されて単調であると共に、餌が供給されるために、生活のためになさなければならないことが少ない。そのため、飼育されている動物の環境を豊富化して野生の動物の生育環境に近づけようとする試みである。

註2) ブロンクス動物園のアフリカ平原では1930年代にライオンと草食動物の通景での展示を行っている。それは自然主義的な展示の秀作である。

註3) 描画に参加した学生は次の通りである。

3年生: 橋爪千恵、福森幸子、新庄智子、大畑沙織、井上真子、三木香織、平井望、児玉千絵、新井ひかり、杉山陽子、峰楨文、新見尚之、豊後政徳、田中伸明、栗林勇太、下篠貴義、仲井愛美子、上田俊輔、加藤佳美、宮下日土望、宇都宮綾子、奥田美穂、玉川有理佐、松島典子、2年生: 千葉沙織、宮夕紀、1年生: 根岸磨与、浅野万希、田端裕香、秀野恒平、内藤祐平、柴原尚子、堀川知佐、光明智一、増井宏樹、堀亮一、蓬田なつみ

註4) 描画に参加した学生は次の通りである。

4年生: 橋爪千恵、井上真子、杉山陽子、3年生: 千葉沙織、2年生: 浅野万希、根岸磨与、悦見麻里、田端祐香

註5) 描画に参加した学生は次の通りである。

4年生: 千葉沙織、齊藤修一、3年生: 浅野万希、根岸磨与、悦見麻里、田端祐香、内藤裕平、秀野恒平、角戸由希、堀川知佐、2年生: 米山小百合、山雄史裕、細谷あみ、新田七海、田村衣瑠子、1年生: 古谷優幸、藤原龍馬、平木雄一郎、中野志保、中里晶子、富永武士、田中誠次、清水一陽、郷上健次、黒嶋久美子、岩崎杏美、今津友介、今井田悟、生田知規、美術学科: 高見保徳、大阪市立工芸高校: 菅野暢子、原田佳奈

註6) この年、私たちは大阪芸術大学で多くのイベントを行った。5月には狩野忠正環境デザイン学科長の音頭で、芸術研究所主催の「アーツアンドエコロジー展」を行った。学科の壁をこえて、作品をつくり、キャンパスを博物館にしようという試みである。このとりくみで、多くの他学科の先生と出会うことができた。さらに、11月には京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授が主宰する大型類人猿保護のための国際シンポジウムであるSAGA

(Support for African/Asian Great Apes) シンポジウムを大阪芸術大学と天王寺動物園の共催で開催することになった。この年は大阪芸術大学グループ60周年記念事業が行われており、この事業は天王寺動物園開園90周年、大阪芸術大学グループ創設60周年記念事業として開催された。SAGAシンポジウムは2004年は東京大学と上野動物園、2005年は京都大学と京都市動物園で開催されてきたが、私が世話人の一人を務めていたこともあり、大阪芸術大学で開催されることになった。大学には多くの支援をいただいたことに感謝したい。この記念イベントとして類人猿研究者の撮影した映像を編集して放映し、演奏を交えた公演の中で研究者が語るというイベントを行うことになり、その企画・構成を中島貞夫監督に行っていた。

註7) 私は基本構想であるZoo21計画の中では、サイやカバは、通天閣や高速道路を観客の視線から外し、奥に草食動物のエリアを配することで、両者を通景として眺めることを提案していた。アイファーの計画に関わる事情で設計から離れている間にこのエリアが設計され、造成された。設計はこの二つの原則を外していた。

註8) 描画に参加した学生は次の通りである。

4年生: 清水一陽、生田知規、3年生: 奥明洋、齋藤陵悟、原友里恵、香川朱美、館祐輔、高嶋一利、2年生: 生田雄治、柳田公一、西村菜摘、山田歩、康あんな、福田裕子、猪尾香里、南直樹、1年生: 齋藤勇樹、智原桃子、前田恵、田中綾乃、川辺恵三子、桜井香奈、秋津実咲、広川未来、芸術計画学科3年生: 前原緒璃艶、副手: 福森幸子





## 《筆者》

大 笹 吉 雄	大阪芸術大学元教授（日本演劇）
小 谷 訓 子	大阪芸術大学講師（ルネサンス美術史）
篠 沢 健 太	大阪芸術大学准教授（ランドスケープデザイン）
末 木 利 文	大阪芸術大学教授（演出）
田之頭一知	大阪芸術大学准教授（美学・音楽美学）
田 端 修	大阪芸術大学教授（都市論・都市設計）
出口 逸 平	大阪芸術大学准教授（日本文学・演劇）
豊 原 正 智	大阪芸術大学教授（映像学）
東 村 哲 志	大阪芸術大学嘱託助手（都市デザイン）
福 原 成 雄	大阪芸術大学教授（造園・庭園）
堀 田 充 規	大阪芸術大学准教授（舞台美術）
若 生 謙 二	大阪芸術大学教授（造園学）

## 《表紙制作者》

宮 本 知	大阪芸術大学教授（ヴィジュアルデザイン）
-------	----------------------

## 《編集後記》

「藝術31」が完成し、皆様にお届けできる運びとなりました。今年4月、前研究所の所長山縣熙先生の後任として所長を引き受けることになり、重責を感じております。

藝術研究所とは何をするとところか？ と、よく質問を受けます。それに対し、今は「領域を超えた藝術の研究をするとところだ」と抽象的な答えをしています。

藝術とは？ 藝術の領域とは？ 果たして藝術に領域はあるのか？ だれも踏み込んでいない領域は？ その答えについて、私自身、昔も今も自問自答し葛藤の日々です。この問いはこれから先もずっと続くでしょう。私自身の答えはでないかもしれません。しかしながら、藝術研究所が、そしてこの「大阪芸術大学 紀要」がその問いかけの具体的な一石を投じるきっかけのひとつになれば、と願っています。

最後にお忙しいなか編集の実務を担当してくださった委員の先生方と研究所の松下陽子さんに改めて深く感謝いたします。ありがとうございました。

また、この場をかりて2009年の藝術研究所の企画をご案内させていただきます。第2回目「5つ星デザイナーの饗宴」国際招待ポスタートリエンナーレ2009を行います。また、第3回目になる「世紀のダ・ヴィンチを探せ」高校生コンペティション2009を行いますので、合わせて皆様方のご協力、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

松 井 桂 三

大阪芸術大学 紀要〈藝術〉 31

---

平成20年12月1日発行

発行／大阪芸術大学

大阪府南河内郡河南町 TEL0721-93-3781

編集／大阪芸術大学藝術研究所運営委員会

委員長 デザイン学科・教授 松井桂三

実務委員 デザイン学科・准教授 江尻幹子

文芸学科・教授 笹谷純雄

教養課程・教授 田中敏雄

芸術計画学科・教授 豊原正智

文芸学科・教授 長谷川郁夫

芸術計画学科・教授 樋口光治

文芸学科・教授 山縣 照

印刷／株式会社ウイング